尊敬関連感情と試験成績の関連

○近藤 聡太郎¹・岡ノ谷 一夫¹

(¹ 東京大学大学院総合文化研究科)

キーワード: 尊敬関連感情、畏怖、成績

The Relationship between respect-related emotions and test scores

Sotaro Kondoh¹ and Kazuo Okanoya¹

(¹ Graduate School of Arts and Sciences, the University of Tokyo)

Key Words: respect-related emotions, awe, test scores

目 的

優れた技能・実績・人格を有する他者に私たちは尊敬感情を抱く。Li & Fischer (2007) は、卓越した他者に尊敬感情を抱くことにより私たちがその人物を理想のモデルに設定し、モデルに追いつこうと自助努力することを提唱した。したがって、尊敬感情を抱いたとき、自助努力または努力しようとする動機づけにより私たちの成績が向上すると予想できる。

武藤 (2014) は尊敬感情の下位カテゴリーとして、敬愛、心酔、畏怖、感心、驚嘆という 5 つの尊敬関連感情への分類が可能なことを質問紙調査によって明らかにした。この研究は各尊敬感情が異なる機能をもつことを示唆している。

本研究の目的は、卓越した人物へ抱いた尊敬感情と成績の関連を明らかにすることである。また、各尊敬関連感情別に成績との関連を調べ、成績向上に影響する尊敬関連感情がどれかを検討することである。

方 法

実験参加者は 22 名の大学生 (女性 12 名、 $M=19.05$, $SD=0.90$) であった。実験課題に TOEIC 形式の英語試験、尊敬を喚起する刺激に TOEIC で満点をとったと紹介される人物の映像を用いた。これは多くの大学生が TOEIC を受験するため、TOEIC で満点をとることの難しさと講師の卓越した英語運用能力を参加者が推察しやすく、講師への尊敬感情を抱きやすいのではないかと考えたためである。

実験の流れを図 1 に示す。参加者は TOEIC 形式の英語試験を受験した後、映像を見て、再び同形式の試験を受けた。参加者は最後に質問紙に答えた。映像は TOEIC で満点をとった講師だと紹介される人物を、特に情報が紹介されない司会者がインタビューする形式だった。映像内では司会者が講師に試験のコツを質問し、講師がそれに答えた。質問紙では司会と講師に対する尊敬感情と、尊敬関連感情である敬愛、心酔、畏怖、感心、驚嘆の 6 つの感情の度合いについて 6 件法で評定を行った。解析の際は、(講師に対する評定値) > (司会に対する評定値) の参加者は講師への感情喚起群、(講師に対する評定値 ≤ 司会に対する評定値) の被験者を感情非喚起群と後から区分し、群と受験回数との混合要因で分散分析を実施した。

英語試験は 2 種類用意し、難易度の差が無いことを予備研究により確認した。映像は演劇経験者による演技であった。実験者が作成した同一の台本に基づき男性女性各 2 名 (計 4 名) に一回ずつ講師を演じてもらい、計 4 パターンの映像を収録した。参加者ごとに受験する試験の順番と視聴する映像は無作為に決定した。

図1 実験の流れ

結 果

参加者体の平均点数は 1 回目が 18.50 点、2 回目が 20.00 点となり、対応のある t 検定を実施したところ平均点の上昇傾向を確認できた (図 2; $t = -1.99$, $df = 21$, $p < .10$)。分散分析の結果、6 つの感情のうち畏怖においてのみ群と受験回数の交互作用が有意になった ($F(1, 20) = 9.84$, $p < .05$)。下位検定を実施したところ畏怖喚起群の 2 回目の試験点数が 1 回目の点数に比べて有意に高いと分かった。(図 3)。検定を繰り返して対応した p 値の補正は Bonferroni 法により実施した。

図2 全体の平均点

図3 畏怖の有無と得点の関係

考 察

試験を 2 回受験したため慣れの効果により点数が上昇したことが示唆された。また、畏怖喚起群のみ点数が有意に上昇したことから、慣れと畏怖がそれぞれ成績向上に影響したと考えられる。武藤 (2014) によると、畏怖は卓越した他者に圧倒されおそれ敬う感情である。参加者が講師との実力の差を明確に認識し、その差を縮めようと努力した結果点数が上昇した可能性がある。畏怖が成績向上に資するメカニズムを今後詳細に検討する必要があると考える。

本研究の課題には、講師と司会で尊敬感情の程度に差が生じてほしいという実験者の意図が、参加者にとって読みやすかったことが挙げられる。改善策の 1 つに厳密な統制条件の設定が考えられる。例えば、同じ講師でも真面目な内容を話す講師と不真面目な内容を話す講師を用意し、前者を実験条件、後者を統制条件と設定することで、参加者が無条件に講師に強い尊敬を抱くことを避けられる。今後実験法の改善により、尊敬の精密な喚起と成績への影響の検討を目指す。

引用文献

Li, J., & Fischer, K. W. (2007). Respect as a positive self-conscious emotion in European Americans and Chinese. *The self-conscious emotions: Theory and research*, 224-242.

武藤 世良. (2014). 尊敬関連感情概念の構造——日本人大学生の場合——. *心理学研究*, 85(2), 157-167.

謝辞 本研究は JST(ImPACT) 150800000172、MEXT/JSPS 科研費 #4903, JP17H06380 の助成を受けたものです。